



園だより

平成29年4月25日
佛教大学附属幼稚園



母の日に寄せて

園長 藤堂俊英

私が小学校2年生だった5月のある日、担任のS先生が私たちに「おうちで、お母さんのことをどんなによんでるの？」と聞かれました。それは今から思えば母の日が近かったからというよりも、間もなく赤ちゃんを出産される先生の内から自然と出てきた問いかけだったように思います。ほとんどの同級生が「かあさん」とか「おかあさん」と答える中で、子ブタをペットにして散歩にも連れて行っていた親友のT君だけが「かあちゃん」と答えると、誰かが「ぼくもかあちゃんってよぶよ」と後に続き、教室に和やかな笑いが広がったのを思い出します。そんな思い出があって、以前、幼稚園で子どもたちに「おかあさんのことをどうよぶの？」と聞いたことがあります。答えは私の小学校時代と変わりませんでした。答えの中に「ママ」があったのは世代のちがいでしょう。ちなみに我が家の孫は普段は「かあさん」、何か下心がある時は「ママ」と使い分けているようです。

幼い時に母を亡くした内田麟太郎さんに「ははよ」(『しっぽとおっぽ』岩崎書店)という次のような詩があります。

ぼくはよびかける ママではない おかあさんでもない 「かあちゃん」
でも ぼくは そのひとを よんでしまう 「ははよ」と
かおもおぼえていないから おっかけたきおくもないから
ははよ もし あなたにであったら わたしは なんとよべばいいのでしょうか
ママ おかあさん かあちゃん
おかあさん ということばは はは ということばの はるかむこうにある
かあちゃん は おかあさん ということばの もっとむこうにある
きょうも 「かあちゃん」と よべないで 「ははよ」と よびかけている
ぼくの とおい とおい かあちゃん



この詩を読むと、今でもT君のように「かあちゃん」と呼びかけたい、そしてかあちゃんに「りんちゃん」と呼びかけてほしい内田さんの胸中が伝わってきます。最近、伝統工芸士の称号をもつ人から金襴(きんらん)の布を頂きました。素人の目には分かりませんが、ほんの少し織り間違った所があるのでということでした。立派な織物を前に、つい調子に乗って「せいぜい間違ったださい」とお願いをしてしまいました。織物の裏側を見ると、表からは分からない縦糸と横糸が複雑に絡み合う舞台裏があります。沢庵和尚に「裏なくして表なく、表なくして裏なし」という言葉があります。親子の間のみならず、お互いの名を呼んだり忘れたりするその応答は、表がどんな模様になるかは未だわからない織物の一筋一筋の糸です。子どもたちと編む、大人同士で編む一筋一筋の織糸が、一人では織れない互いの個性を生かし合う織物となるよう、名を呼んでは応える応答の織糸を大切にしていきたいものです。

